「冬ごもる」断章と『堤中納言物語』

――四季の「月」の配置と『狭衣物語』の影をめぐって――

井上新子

はじめに

『堤中納言物語』に付された「冬ごもる」断章は、いつ誰が何のために成したものであるのか、明らかではない。この「謎」を解明する一階梯として、かつて当該断章の表現史的位置を探った[1]。その結果、断章の表現が、『狭衣物語』巻四の狭衣と源氏の宮による和歌の贈答場面を形成する表現や、新古今時代の和歌表現と、共通する部分が少なくないことが認められた。断章は恐らく、『狭衣物語』の影響を受けつつ、中世和歌の空間の中から生成されたと推定される。小稿は、そうした断章と『堤中納言物語』所収作品とがいかなる関係性を有するのか、その一端を記述するものである。

一　「月」に恋情を募らせる男君

まず、「冬ごもる」断章を見る。

冬ごもる空のけしきに、しぐるるたびにかき曇る袖の晴れ間は、秋よりことに乾く間なきに、むら雲晴れ行く月の、ことに光さやけきは、木の葉がくれだになければにや。なほはしのばれぬなるべし、あくがれ出でたまひて、あるまじきことと思ひかへせば、ほかざまにと思ひ立たせたまふが、なほえひき過ぎぬなるべし。いと忍びやかに入りて、あまた人のけはひするかたに、うちとけ居たらむけしきもゆかしく、さりとも、みづからのありさまばかりこそあらめ、なにばかりのもてなしにもあらじを、おほかたのけはひにつけても。（「冬ごもる」断章[2]）

断章では、さやかな「月」をながめ恋しい女を思い、出かけていく男君の姿が語られている。こうした設定は、所収作品中の『逢坂越えぬ権中納言』冒頭のそれと共通する部分が少なくない。

五月待ちつけたる花橘の香も、昔の人恋しう、秋の夕べにも劣らぬ風に、うち匂ひたるは、をかしうもあはれにも思ひ知らるるを、山ほととぎすも里なれて語らふに、三日月のかげほのかなるは、折りから忍びがたくて、例の宮わたりにおとなはまほしう思さるれど、かひあらじとうちなげかれて、あるわたりの、なほ情けあまりなるまでと思せど、そなたはもの憂きなるべし。（『逢坂越えぬ権中納言』）

「花橘」や「山ほととぎす」という夏を彩る景物とともに、「三日月」が登場する。それら周囲の情景に姫宮への思慕を一層募らせ、訪問の念に駆られる男君である。しかし、こちらは躊躇している間に宮中から迎えの使者があり、姫宮を訪問することはかなわない。

どちらも恋の対象の女性は男君につれなく、男君の一方的な苦しい恋が設定されている。また、思いの遂げられぬ意中の女性の他に、それと比較するように気軽な通い所の存在が同時に語られている。断章の「冬」の「さやけき」・「月」に対して、『逢坂越えぬ権中納言』は夏の「ほのか」な「三日月」である。両作品ともその冒頭において、異なる季節の異なる「月」が設定されつつも、その「月」に触発され高まる男君の女性への恋心が形象化されており、注目される。

二　「月」に新しい恋を求める男君

このように「月」と男君の恋情とを密接に関わらせつつ冒頭表現を形成する物語が、『堤中納言物語』中には他にも見出せる。『花桜折る少将』と『貝合』である。前者をながめる。

月にはかられて、夜深く起きにけるも、思ふらむところいとほしけれど、たち帰らむも遠きほどなれば、やうやう行くに、小家などに例おとなふものも聞こえず、くまなき月に、ところどころの花の木どもも、ひとへにまがひぬべく霞みたり。いま少し、過ぎて見つるところよりも、おもしろく、過ぎがたき心地して、

そなたへと行きもやられず花桜にほふこかげにたびだたれつつ

と、うち誦じて、（略）　（『花桜折る少将』）

「月」に導かれるように早々に女性の許を辞去した、男君の朝帰りの姿をかたどっている。「月」と「桜」の美しさに惹かれ歩を止めた男君は、そこで可憐な姫君を発見した。新しい恋の展開を予感させる垣間見である。が、物語結末部において、その姫君ならぬ老尼君略奪の失敗が語られている。

一方、『貝合』冒頭は以下の通りである。

長月の有明の月にさそはれて、蔵人少将、指貫つきづきしく引きあげて、ただ一人、小舎人童ばかり具して、やがて朝霧もよく立ち隠しつべく、ひまなげなるに、「をかしからむところの、あきたらむもがな」と言ひて歩み行くに、木立をかしき家に、琴の声ほのかに聞ゆるに、いみじううれしくなりて、めぐる。　（『貝合』）

「長月の有明の月」に誘われて、男君は新しい女性との出会いを求め忍んで行く。明け方の情景である。大人の恋を希求した男君であったが、その後遭遇したのは子供たちの世界であった。新しい恋人を探すという本来の男君の目的からすると、こちらも失敗に終わる。

両物語とも、新しい恋を求め彷徨う男君の姿を、「月」が照らしている。『花桜折る少将』は春の「くまなき月」であり、一方『貝合』は秋の「有明の月」であった。

三　四季の「月」の配置と『狭衣物語』の影

以上の四編の冒頭表現は、「月」とこれに照らし出される男君の恋情とが語られているという点で共通する。新しい恋人を求める『花

桜折る少将』と『貝合』、叶わぬ意中の人を思う『逢坂越えぬ権中納言』と断章とが、それぞれ対になっている。これに「月」の描写を加えてながめると、「春の月」と「秋の月」、「夏の月」と「冬の月」とが一対になっていると捉えることができる。おのおのの「月」は、異なる時間帯の「月」である。『花桜折る少将』は「夜深」い「くまなき月」、『貝合』は「有明の月」、『逢坂越えぬ権中納言』は「夕べ」の「三日月」、断章は文脈から恐らく宵の「光さやけき・月」であろう。この時間帯をめぐっても大きく、『花桜折る少将』と『貝合』の夜中から明け方の「月」、『逢坂越えぬ権中納言』と断章の夕方から宵の時分の「月」という、二つの対に分けられる。このような四編の対応関係に注目すると、断章には、所収作品三編の冒頭表現を意識し、これらに「冬の月」から触発される恋物語を加えるために付加されたという一面が存すると考えられる。『堤中納言物語』という集へ断章が付された趣向には、集に四季の「月」を配することを目論んだ意図がうかがえることをおさえておきたい。

ところで、「春の月」を描出する『花桜折る少将』については、『狭衣物語』巻四の狭衣による斎院訪問から故式部卿宮の姫君垣間見へと続く一連の場面との類似が注目されている。土岐武治氏は両者の場面群を比較し、『花桜折る少将』から『狭衣物語』への影響を指摘した。[3] これに対し、川端春枝氏は逆の影響関係を想定し、「『花桜折る』は狭衣物語巻四の、巧みに仕組まれたパロディ」と位置づけた。[4] 稿者も、姫君ならぬ老尼君略奪という『花桜折る少将』の結末は、狭衣が美しい母娘を垣間見し母に特に心惹かれたという『狭衣物語』の設定を踏まえ、これを更に転じたパロディである可能性の方が高いと考える。加えて断章に、やはり『狭衣物語』巻四末尾近くの狭衣と源氏の宮との「月」をめぐる和歌の贈答場面の表現の影響が見られることについては、すでに指摘した。[5] このように、「春の月」の『花桜折る少将』と「冬の月」の断章の両方に、『狭衣物語』の影が認められることは注目される。

また稿者はかつて、『逢坂越えぬ権中納言』と『狭衣物語』巻一の五月五日前後の時期を背景として展開される一連の物語の叙述とが、構成や表現面において類似することから、前者から後者への影響の可能性について言及した。[6] そのような『狭衣物語』との共通性という目で眺めると、『貝合』の蔵人少将が子供たちを垣間見る場面は、『狭衣物語』巻三の狭衣が飛鳥井の君の遺児を求めて子供たちの様子を覗く場面と、作品世界の醸し出すユーモラスとも評されるような雰囲気ともども類似するように思われる。この例などは影響関係も微妙な問題であり、ましてや両者の前後関係にいたっては不明という他ないが、『狭衣物語』との類似性がこれら一連の『堤中納言物語』所収作品にうかがわれることは注目すべき現象であろう。

断章は、こうした『狭衣物語』の影響を受けたと考えられる所収作品、及び『狭衣物語』へ影響を与えたために『狭衣物語』と類似する性質を有すると考えられる所収作品の存在に引かれつつ、『狭衣物語』を少なからず意識した表現により形象されたのではないかと

考える。とりわけ、「春の月」の『花桜折る少将』と「冬の月」の断章とは、『狭衣物語』との密接な関わりによって互いに呼応し合う表現となっていると言えよう。

おわりに

断章と『堤中納言物語』所収作品との関係性の一端を、断章の「冬の月」と所収作品三編冒頭の「春の月」・「夏の月」・「秋の月」との対応、『狭衣物語』の影という観点から記述した。他所収作品と断章との関係性は現段階では明かにし得ていないが、断章の表現が集としての『堤中納言物語』を少なからず意識し、形成されたものであることは確認し得たのではないかと思う。春夏秋冬の「月」に照らされる男君の風貌は、新たな恋を求める姿であったり、叶わぬ恋の対象を思い続ける姿であったりと、王朝物語の男君たちの典型的な姿であった。

断章が、『源氏物語』は言うまでもなく『狭衣物語』をも少なからず連想させる表現によって形象化されていることは、それが形成されたと考えられる新古今時代の和歌の動向とも無縁ではなかろう。『無名草子』の『狭衣物語』へ言及した周知の文言や、藤原定家の一連の営み、歌人たちの実際の和歌の作例等を眺めても、中世期以降『狭衣物語』の影響が様々なかたちで散見されるのである。こうした環境的要因との関わりだけでなく、このようなかたちで『狭衣物語』の影が認められることの主題的意味合いについても、さらに追究していかねばならない。物語文学史の把握の問題も視野に入れながら、今後の課題としたい。

〔注〕

(1) 拙稿「堤中納言物語「冬ごもる」断章考」(「国語国文　研究と教育」44号、平成18年3月)。

(2)『堤中納言物語』の引用本文は、宮内庁書陵部蔵本(『影印本 堤中納言』笠間書院)を底本とし、他本により私に校訂したものを用いる。なお、引用本文には適宜傍線を付す。

(3) 土岐武治著『堤中納言物語の研究』(風間書房、昭和42年)第四編第五章第一節「『花桜折る少将』の狭衣物語への影響」。

(4) 川端春枝「月に紛う花――花桜折る中将考――」(「国語国文」62巻7号・707号、平成5年7月。のち、王朝物語研究会編『研究講座 堤中納言物語の視界』新典社、平成10年、再録)。

(5) 注(1)の拙稿。

(6) 拙稿「『狭衣物語』における(挨拶)としての引用表現」(「国文学攷」144号、平成6年12月。のち、『日本語学論説資料』32号、再録)。

〔付記〕本稿は、科学研究費助成研究「『狭衣物語』を中心とした平安後期言語文化圏の研究」(平成16～18年度。研究協力者として参加)の研究成果の一部である。

――いのうえ・しんこ、大阪大谷大学・甲南大学非常勤講師――